
IS<インフィニット・ストラトス> ~ 咲き乱れる黒百合 ~

紅山車

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS>インフィニット・ストラトス〜咲き乱れる黒百合〜

【Nコード】

N7273R

【作者名】

紅山車

【あらすじ】

二月十四日。

一足早く、世間にはバレンタインという名の春が訪れた。

恋人は、チョコレートという想いを通じて、互いの相愛を確認しあう。一人きりの少女は、この日限りの勇気を振り絞り、チョコレートというカタチに想いを乗せ、片想いにぶつかっていく。一人きりの少年は、その片想いの相手であることを願い、一日中落ち着かないでいる。

二月十四日。

この日、世間は桃色に包まれる。

けれどIS学園には、そんな世間の常識などは通用せず――。

「そういえばー、おりむーはチヨコとか貰えないのー？」

この一言を発端に――黒百合達が、火花を散らす。

黒百合の花言葉は『恋』。

または――『呪い』。

若しくは――『復讐』。

二月十四日。

IS学園が、黒百合色に染まる。

1話（前書き）

インフィニット・ドレス！（違）

というわけで、IS>インフィニット・ストラトス<短編です。以前Twitterで呟いていたのを投稿してみる。ただ、どうにも完成が見えないので、こまーしゃる5の天子短編の時のような短期集中連載という形を取り、何回かに分けて投稿をします。どれくらい続くかは未定ですが、恐らく三、四話になるのでは、と推測。東方以外の初の執筆、ということ、不慣れな点多々あると思いますが、そこはどうか一つ、ご了承下さい。

ネタは時期外れなバレンタインものです。いや、書き始めたのが丁度その時期だったもので。時間を見つけてちまちま書いてきたのですが、予想以上の長さになってしまい、こういった形で公開となっ てしまいました。短編として公開するには多くなりすぎた文章量をぶつ切りにしてお送りする……わわわ、話数稼ぎちゃうわ！起承転公開までの時間稼ぎや！しかも端っこはまだ未完成という尻切れトンボっぷり。……なんだろう、今頃になって不安感が拭えなくなってきた。

ついでに言うと、タイトルは思い付きです。黒百合とか全く関係ありません。ちなみにこの黒百合、『黒』と謳っている割に花は茶色だったりします。チョコレートの色だから丁度いいよね、とか言うのがタイトルの由来だったりします。どうでもいいですね、はい。

それでは、紅山車の数少ない新しい引き出しの先を、ごゆるりと。

1話

『国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。夜の底が白くなった。信号所に汽車が止まった。』

向側の座席から娘が立つて来て、島村の前のガラス窓を落とした。雪の冷気が流れ込んだ。娘は窓いっぱいに乗り出して、遠くへ叫ぶように、

「駅長さあん、駅長さあん」

明かりを上げてゆつくり雪を踏んで来た男は襟巻で鼻の上まで包み、耳に帽子の毛皮を垂れていた。』

り抜粹

——川端康成『雪国』よ

その登場は、正に世界を——地球の常識を、根底から覆した。

天才、篠ノ之束博士が生み出した、戦闘用パワードスーツ——
インフィニット・ストラトス
名をISという——の戦闘力、軍事力、制圧力は、他のどの国をも凌駕するほどの性能を見せた。

それまでの軍事兵器は、まるで鉄屑のように扱われ。小手先の作戦など、無価値である事を知らしめられ。

気が遠くなるほどの歳月、資金を掛けて開発されてきた最先端兵器も。

篠ノ之博士の頭脳によって作られたISの前では、無価値なものと成り下がった。

自国の全てを否定された、そんな憤りに駆られた国々は——その圧倒的な兵器を善用し世界を破滅に追いやってしまう前の対応策として、ある幾つかの要求を、日本国に突きつけた。

その一つが、『IS操縦者養成のための学校を作ること』。

そして、今。

女性しか動かせないはずのISを『何故だか』動かせてしまい、入学試験でも『何故だか』試験官に勝ってしまった俺は——世界で唯一、男性のIS操縦者として、ここIS学園に籍を置いている。入学して当初は戸惑いもあった（というか、それしかなかった）が、幼馴染の篠ノ之箒（ののすけ）や凰鈴音（ほうねん）、同級生のセシリア・オルコットなどの助けを得ながら、何とかこの学園唯一の男子生徒としてやっていけている……が。

まあ、それでもトラブルなしに、とは行かず。

シャルロット・デュノア（俺はシャル、と、そう呼んでいる）、ラウラ・ボーデヴィツヒの両名が転校してきたのを皮切りに、自業他業問わずにさまざまな問題が、このIS学園を取り巻いてきた——いや、今も取り巻いている、といっても、過言では無いだろう。

まあ、とはいえ。

曲がりなりにも、ここは教育機関。そうトラブルばかり起こっているか、といえば、そうではない。なあんにもない、平和な一コマだつて、ちゃんと存在する。

そして、多少——いや、かなりの先進的技術を取り入れていようと、人というものの本質、というのは中々に変わらないもの様で。

吸引力の変わらない、唯一つの掃除機。

そんな某有名掃除機メーカーの謳い文句の如く、織斑一夏という人間を形容するならば。

集客力の変わらない、唯一つの男子。

ちなみに、この男子というところは、『客寄せパンダ』に置き換えてもOKである。むしろそっちのほうがしっくり来そうで、なんと涙が出てきそうである。

まあ、何故ここまでつらつらと、長口上をドミノ倒しの準備の如く、慎重に並べてきたのかといえ——誤解をしてもらいたくなかったので、こうまで丁寧に説明したのである（いや、今までに起こったことを、一つ一つ事細かに説明しようと思ったら、それこそ文庫本で六冊かそれ以上は必要になりそうなのだけだ）。

この話を聞いた諸兄らは、きつとこう思ったことだろう。

「周りが女子ばかりで男子一人だなんて、うらやまけしからん」

「色好みじゃ！平成の光源氏がここにおるぞ！」

「つていうか死ね」

「氏ねじゃなくて死ね」

「妹を悲しませないためにも、限界まで苦しんで死ね」

……最後は、少しこちら関連の私怨がはいってしまったが、つまりはそういうことだ。今の俺の境遇がうらやましい、入れ替えてくれ、なんて思っている男性が、確実に居るのだろう。

ならばこちらは、こう返そう。

『そんなに楽なものではない』、と。

事の発端は、授業合間の昼休み。

食堂での、ある生徒の言葉だった。

「そういえばー、おりむーはチヨコとか貰えないのー？」

サイズが合っていない、ぶかぶかのパジャマのような出で立ちの少女——通称のほほんさんは、学食のうどんをずるずる啜りながら、こんな事を聞いてきた。

「チヨコ？」

言われ、俺ははて、と思案する。この季節、チヨコ、という単語からは、どうしてもある一単語に到達するのだろうが、あいにくとその時は色々することが重なってしまって、最近の日付もあやふ

やになってしまっていたため、失念してしまった。

「あれー、ひょっとしておりむー、来週バレンタインだって忘れてたのー？」

「……ああ、バレンタインか。なるほど」

ぽん、と手を打つ。まさかのほほんさんに物を思い出させられる時が来ようとは。日々蓄積された出席簿攻撃のダメージは、着々と俺の記憶力に影響を与えているようである。千冬姉も少しくらいの茶目っ気は、見逃すくらいはしてくれたらいいのだけど、望むべくもないか。

「でもなあ、俺あんまりバレンタインに良い思いしたこと無いんだよなあ」

嘆きながら、過去十数回の二月十四日を思い返してみると、一度たりとも本命チョコというものを貰った覚えが無い。義理で、というのはちよくちよくあったし、その一つ一つには感謝をしているけれど、やっぱり男ならば人生のうち、一度くらいは本命チョコというものを貰ってみたいものなのだ。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

——あれ。

そういえば、のほほんさんと話し出してから、俺の周囲は異様に静かだ。普段はもっと、こう、今時の女子高生らしい活気溢れたガールズトークなんかを繰り広げている頃合なのだけれど。

「なあ、箒？」

試しに、俺のすぐ右隣に座っている箒に話しかけてみる。

「五月蠅い。食事の時くらい、黙ったらどうだ」

「……………」

愛想ゼロのそっけない言葉。

そんな千冬姉みたいなことを言わなくっても良いじゃないか。と
いうか普段のおしゃべりを棚に上げて俺を叱り付けるとは、一体ど
ういう了見だ——とは、言えない。その内容が正論であるが故に、
俺はそれきり黙りこみ、手元の味噌汁をすすする。うん、今日も食堂
のおばちゃん、良い仕事をしているなあ。

「と、ところで、一夏さん？」

と、右斜め前からの声。顔を上げると、ふんわりとウェーブがか
かった金髪に、少し目じりの下がったセシリアの視線が交錯した。

「ん、どうかしたか？セシリア」

「ええっと、その。一夏さんは、一体どういったチョコレートがお
好みののかしら、と。少々、ほんの少し、興味を持ちまして！」

顔を真っ赤にしながら、早口で喋る。俺はその様子に面食らいな
がらも、答える。

「あ、ああ。そうだな、別にチョコが嫌いなわけじゃないから……
その中で好きなチョコ、って言われると……」

「い、言われるとっ!？」

気がつくと、顔のすぐそばに鈴の顔があるのに気付く。トレード
マークであるツインテールが首筋に当たって、笑ってしまいそうに
なる。

「……鈴、悪い。ちよつと離れて——」

「ぼ、僕も知りたいなあ!一夏の好きなチョコ!」

「うおわ!」

今度は左サイドからシャルの声、そして同じように近づけられる
顔。同時にやってくる甘い香りは、なんだろう——香水か何かをつ
けているのだろうか。その匂いに、思わずどぎまぎしながらシャル
から視線を逸らす。

「シャ、シャルも。顔、ちよつと離してくれよ——って!」

「ほう、一夏の好きなチョコレートか。興味深いな」

しかし まわりこまれて しまった!

視線を逸らした背後にあったのは、ラウラの特徴的な銀髪、眼帯。

「私はバレンタインなどという浮かれた行事に興味などは全く無いが、他ならぬ私の嫁の願いだ。どんなチョコが良い？なんでも言うてみる」

もう吐息が吹きかかりそうなまでに近付けられた顔と、至近距離で受ける鋭い視線——俺は、もうこの食堂に逃げ場など存在しない事を悟った。

「え、えつと、だな」

どもるように口走る言葉に、縦に揺れる四つの首。

誰かに助け舟を要請しようにも、のほほんさんはもうこっちは興味を無くした様に「めだまおやじー」と言いながら、うどんの上に卵を浮かべているし、箸に到ってはもう食べ終えた食器とトレーを下げて席を立ててしまった。後生過ぎる。

さて、なんと答えるべきか——ここで間違った答えを選ぶものなら、即刻四人の専用機を装着する音が聞こえてくるのは、IS学園に入学して得た経験上間違いない。けれど困った事に、俺はあの悪魔が忍び寄るような音を、回避できた覚えが無い。全面地雷で埋め尽くされたマインスイーパーをプレイしているような、そんな錯覚にまで陥ってしまう。まさに回避不能の惨劇だ。ああ、この手紙を読んだ人がもし居たなら、せめて正しい解答を見つけ出して下さい。それだけが、俺の望みです——。

「……何をやっとなるか、馬鹿者共が」

すばーんすばーんすばーんすばーん

「きやうっ！」

「いたっ！」

「あうっ！」

「……っ！」

悪魔の足音のような、ISの装着音の代わりに聞こえてきたのは、小気味良い音が四回と、小さいうめき声が同数。上からセシリア、鈴、シャル、ラウラ、の順に、頭に硬い出席簿が振り下ろされたのである。

「もう食堂に残っているのは貴様らだけだ。さつさと教室に戻れ。専用機持ち、それもクラス代表と各国の代表候補生が揃って授業に遅刻とあつては、周りの者に示しがつかないだろう」

それとも、と。

出席簿を振り下ろした人物——織斑千冬教諭の視線が、一層険しいものへと変わる。

「貴様ら揃って、ISを担いでグラウンド百周をくれてやろうか。周りの者の見せしめにはなるだろう。著しく授業に遅刻した者はこくなる、という——」

「い、以後気をつけますわ！」

「ご、ごめんなさいもうしませんー！」

「し、失礼しました！織斑先生！」

「きよ、教官の命とあらば、従わぬわけには行かないな」

すたこらさつさと教室に戻っていく四人。つて、俺も急がないとやばいな。

「すいません、今すぐ戻りまっ！？」

駆け出そうとする俺の頭に、振り下ろされる出席簿^{てっぴい}。

「貴様一人だけ、これから逃れようと思っても、そうはいかんぞ」
また物覚えが悪くなりそうだ。

その夜。

セシリア・オルコットは、机に向かって片時も休むことなく手を動かしながら続いていた。ルームメイトはもうとつくに床についており、部屋の電気も消灯されているため、卓上ライトで手元を照らしながら、一枚の紙に——一心不乱に、何かを書き込んでいる。

けれど、ふとセシリアの手が止まる——そのまま頭が下がっていき、ごすん、と音を立てて、その紙の上に頭を打ち付けた。

「……いけません……いけませんわ、このままでは……」

顔をこわばらせながら、先ほどの紙を丸め、投棄する。後ろのほ

うで、「きゃんっ」という声が聞こえてきたが、構わずに新しい紙を用意し、またそこにガリガリと何かを書き始める。

「……一夏さんが喜ぶようなもので、なおかつ、他の四人を出し抜けるようなもの……」

万年筆の先端が動くにつれ、セシリアの脳内で想定できるイメージが、紙の上に映し出されていく——が、数分後には、またも頭を抱えている自分が居た。

歯がゆい現状に溜め息をつきながら、眠気を噛み殺し、また新しい紙を取り出す。

少し前に飲み干したコーヒーカップのふちには、苦悩の時間を表すバロメータであるかのように、茶色い線が形成されていた。

「一夏の好きなチョコ……ねえ」

自室のベッドの上で。

クッションを胸に抱えながら、凰鈴音は静かに呟いた。

中学時代にも、彼——織斑一夏にチョコを渡した事はあったのだが、喜ばれたか、というところ——正直微妙なところがある。どうも一夏は、鈴のことを異性と見ずに、女友達としてみていた風があるから、渡しても芳しい——そう、例えば告白に到るような——結果は出なかった。まあ、その時に結果が出ていたなら、今こうやって悩む必要も無いわけだけれど。

「……はあ……」

悲しすぎて涙が出て来そうになる。

一年生のときは、チョコを作るのに失敗して、結局出来合いのものを買って済ませてしまった。

二年生のときは、多数の女生徒に囲まれて結局うやむやのまま渡せずじまい。

三年生のときは——もう、鈴は日本には居なかった。

ということは実質、鈴が渡したチョコは、既製品のみということになる。これではほとんど渡して居ないようなものではないか。

今年こそは、絶対に。

クツシオンを抱きしめる力が、より一層強くなる。

ライバルは多いが、負けるわけにはいかない。

だって、私は——織斑一夏の、幼馴染なのだから。

「ふふ」

鼻歌を歌いながら、シャルロット・デュノアは、ボウルの中身をへらでかき混ぜていた。

ボウルの中のチョコレートは、もう良い塩梅に湯銭で溶かされている。試しにへらを持ち上げてみると、長く糸を引き、固形の面影などもう無くなっていた。

「うん、よし。えっと、次は……」

傍らに置かれている、コピー紙に印刷された特製レシピに目を向け、次の工程に移る——前に、ふと完成品の写真が目に入り、シャルの顔は自然とほころんでいく。

「……こんなの渡したら、びっくりするだろうなあ。一夏」

驚きつつも嬉しそうな一夏の様子を想像して——えへへ、と頭をかきながら、恥ずかしさをごまかそうと試みる。けれど人間の思考というものは、そうは単純に出来ていないようで、シャルの脳内は、思考から妄想へと移り変わっていった。

「シャル、このチョコ本当にうまいな。大変だっただろ？」

「ううん、そんな……い、一夏のことを思ったら、全然大変じゃなかったよ」

「……シャルッ！」

「え、わ、ひゃあっ!?!」

「シャル、好きだ。大好きだ」

「……うん。僕も、一夏のことを——」
深々。

「え、えへ、えへへ……」

朴念仁の一夏がそんなことをするはずがない、というのはわかり

きつているのだが、だがしかし恋は盲目である。

「一夏あ……」

シャルはあっさりと、しかしずっぷりと、妄想の海に沈んでいた。

「うむ、そうか。アドバイス、感謝するぞ」

そう言つて、ラウラ・ボーデヴィツヒは携帯電話の通話終了ボタンを押した。

電話の相手は、クラリツサ・ハルフォーフ——ラウラがドイツに居たところから懇意にしている、頼りがいのある元同僚、である。今でもちよくちよく、こうやって連絡を取り合つては、ラウラに的確な指示を与えてくれている。

そして、今回の内容は、もちろんバレンタインがらみである。

ラウラは、このIS学園に来るまで——いや、織斑一夏に出会うまで——俗に言う『女の子らしい事』に、全くと言って良いほど興味が無かった。ドイツに居たところは、軍人として必要な知識だけを備え、それに相応する行動力が備わっていれば、それで事足りたからだ。

今でも服やアクセサリーには無頓着なところも多く、その度にルームメイトのシャルロット・デュノアに叱責されている。

だが今回は、そういうわけには行かない。

織斑一夏が——ラウラの『嫁』が、セント・バレンタイン・デーにチョコを欲しているのであれば、全力でその要望に答えなければならぬ。そしてその場合、シャルロットを頼るわけにもいかない。彼女も一夏に心を奪われている以上、これから先——少なくともバレンタイン当日までは、気を許すことなど出来ないのだ。

「……さて」

それは、逆に言えば——この扉の先で、シャルロット・デュノアが待ち構えていても、なんらおかしいことは無い、ということの意味する。ルームメイトを疑うような事など、本来ならばしたくは無

いが、軍人たるもの油断をするわけにはいかない。

常に、最悪を想定し、最善を選択すべし。

「……………ッ！」

扉のノブに手を掛け、一息に開け、即座に身を固め。

そこで見たものは。

「えへへ、駄目だよ一夏……」

呆けているルームメイトの姿。

そして、半固体と化した、チヨコレートの塊。

部屋に充満する、甘ったるい匂いに、ラウラは思わず顔をしかめた。

何がチヨコだ、何がチヨコだ、何がチヨコだ。

「何がチヨコだッ！」

鬼のような形相で、竹刀を振り回すのは、篠ノ之箒。

部屋の隅では、頼むから同情でやってくれ、と言わんばかりに、箒のルームメイトが恐怖に身体を縮こまらせている。だが箒はお構い無しに、切れのある一閃を、何かに取り憑かれたように虚空に振るい続けていた。

箒の虫の居所が悪いのは、主に二つの理由によるところが大きい。一つ目は、バレンタインが近付いている事。

箒は幼少時代から、この行事があまり好きではなかった。小学校のころ、その一本筋な性格から男子に『オトコオンナ』と言われ、からかわれていた（そこを助けてくれたのが織斑一夏であった）が、実はその弊害は女子にも広がっていたようである。

バレンタインに、箒のところにチヨコレートを渡しに来る女子が居たのだ。

それも、一人や二人ではない。下手をすれば四、五人が同時にチヨコを渡しに来たこともあった——その女子達は、その場で口論になり、取っ組み合いの喧嘩を始めそうになったところを、箒が慌てて止めに入った、というオチ付きである。

そして、二つ目の理由。

箒はチョコを作ったことがない。

バレンタインに、という括りを外しても皆無である。

「あんな、貧弱なもの、誰が、作るかッ！」

実家は剣道の道場で、幼いころから稽古漬け。さらに姉の篠ノ之束は、世界で知らない者は居ないほどの有名人、なのに本人はその自覚も持たずに、ちゃらんぽらんとあっちこっちを放浪して……と来れば、休まる暇などない。

そんなチョコの甘い匂いなどとはまるで無縁の世界に居た箒には、チョコレートなんて女の子の代名詞なものは受け付けられなかった。ただでさえ菓子と和菓子、これに決まっている——そう公言して憚らぬ箒である。

「チョコレートなんて……ッ！」

けれど。

けれど。

「……………」

荒く息を吐きながら、竹刀を降ろす。

一夏は。

果たして、私が作ったチョコレートを、欲しがるだろうか——。

「も、もう終わった……？」

ふと気がつくと、毛布から頭をこっそりと覗かせている、ルームメイトの視線に気付く。

「……あ。す、すまない」

怖がらせていた、ということに気付くと、箒は慌てて竹刀をケースに戻す。ルームメイトは、箒の様子が元に戻ったのに安堵してか、「汗だくだし、シャワーでも浴びてきたら？」と勧めた。確かに、汗で濡れた服が身体にまとわりついていて、このまま寝るのは気がひける。少し暖かくなってきたとはいえ、季節はまだ冬。風邪をひいてしまう心配もあるし、それに何よりこの状態で寝られるほど、私は女を捨ててはいない。

……多分。

「そうさせてもらう。夜中まですまないな」

「構わないよ、これくらい」

一つ頭を下げ、浴室へと移動する。

そうだ。やりもしないで、何がわかるだろう。それに、一夏の味の好みを一番知っているのは、最も付き合いの長い私ではないか。それなら——別に、これといった感情があるわけでもないが——日頃溜まった一夏の疲れを労う為に、作ってやるのも、まあ、やぶさかではない。

「っ、疲れているときに甘いものは嬉しい、と、一夏も言っていたしな」

やましい想いがあるわけではない——けれどそれに反比例するように、筈は長い時間、シャワーを浴びた。そのやましい想いを退散させるように。

1話（後書き）

そろもう（プロローグ的な）あれよ

これくらい（の長さ）で（起承転一話分より）ちょっと多いからな
つて、なんでそんなを、起承転のことを言われなアカンのや！
読「紅ちゃん、何をそんなに力んどるんや（その目は優しかった）」

正直スマンかった。

次話は近日中。

2話（前書き）

2話です。

関係ない話で前書き。プロ野球開幕延期、プロスピ2011発売延期で涙目。どっちもしゃーないことは解っているけれど、やっぱり期待していた分お預けを食らうと、落差というものが大きい。野球は見たい、けど貴重な電力食いつぶしてまでやっているのを見たいかというところ……うーん。関西でデーゲームオンリーなら、問題無いとは思うんですけど。

とりあえず言いたいことは、あの読売のタヌキオヤジ二人を誰か黙らせてこい。あいつらのせいでセ・リーグ全体が悪く見られる。これ以上収益がパ・リーグに持っていかれたら、広島と横浜は存続の危機だと思うんだ。地味にヤクルトも、去年の暮れに身売り報道とが出てたし。ああ、新潟が手招きしている。

閑話休題。

とりあえず2・14のさわりだけ。ところで、ニュースでよく耳にする『3・11』という言葉が、プロレスの開催日に聞こえるのは私だけでしょうか。『3・11、後楽園ホール大会』とか。

いけない。脱線するのが私の悪いところですね。

とりあえず完成分だけは公開していきます。まだもちっとストックあります。本当に、どれだけ書いていたのだから。どうしようもないやつちゃ紅山車とか言う奴は。

シャルはアニメだけでなくこっちでも優遇されてるから一番手だよ！印象が薄くなるって、そんなことありませんよ多分。全国のシャルロッツ党の期待に沿えただろうか。うーん。

2話

さて二月十四日。

バレンタイン当日、である。

ISの登場で肩身が狭い世の男子諸兄も、この日はかりは身なりを整え、齒の浮く台詞の一つでも言いたいのだろう。そしてそれは、IS学園唯一の男子である一夏も同じ事である。

何せ入学から好奇の視線に晒され続けてここまできたのだから、流石にゼロということはないだろう。そこまで嫌われるようなことは、しては居ないはずだ。まあ、自分に本気で恋心を抱いている人が居て、その人がチヨコを渡してくるような、そんな最高の青春の1ページが訪れればいいのだが——恐らく女子生徒の多くは、『チヨコレートを渡す』ということ自体に意味があるのだろう。だから正直のところ、それほど本命のチヨコレートというのは期待していない。

けれど俺も、一介の男子。やっぱりちょっとそわそわしてしまうのだ。

義理でも何でも、もらい物には感謝を込めなければならぬ。幸いにも甘いものは嫌いでは無いから、多量が多くても問題はない。「なんて、取らぬ狸の何とやら、だな」

そんな甘い考えに苦笑いをしながら、朝食を取ろうと食堂へと入る。そういえば、部屋からここに来るまで、誰ともすれ違わなかったな。もしかして、皆早起きしたのか？どうやら、そわそわしているのは男だけではないということを再確認。

「……………織斑君！」「……………」

——確かに甘い考えだったか、とも、再確認。

食堂の扉を抜けると、そこは女性徒の波だった。朝の靄が見えなくなつた。目の前に女生徒が止まつた。

向側の座席から女生徒達が立つてきて、一夏の前に手を差し出した。煌びやかなラッピングがなだれ込んだ。女生徒達は机一杯に乗り出して、遠くへ叫ぶように、

「……………」このチョコ、受け取ってください……………」

「……………」

甘い考えを引っさげて悠々と食堂に入ってきた一夏はリボンで頭の上から埋め尽くされ、耳にチョコの包装紙を垂れていた。

「……………」

はっは、見る世の中の男子ども、この俺のやつれた表情を。この顔、そして惨状を見ても、IS学園に行きたいと言えるか。俺は今から360度、女子の視線を受けながら、朝飯代わりにチョコレートを食べなければいけないんだ。どうだ、うらやましいか。うらやましくないだろう。哀れむだろう。それでいいんだ。ただしもう二度と、そんな邪な思いを抱くんじゃあないぞ。一夏おにーさんとの約束だ、いいな、絶対だぞ！振りじゃないぞ！

ちなみに、傍らに置かれているのは紙袋。デパートに置いてあるような、至ってシンプルなものである。ただしサイズは大きく、紐部分を合わせると俺の背丈の半分をゆうに越す。チョコ攻めに遭う俺を気遣つてか、食堂の人がくれたのである。けれどその気遣いは、紙袋の中にデフォルトで幾つかチョコレートが入っていたことで、少し感謝の心が薄れてしまう。いや、嬉しいんだけど。嬉しいんだけど、もうちょっと後のほうにチョコを単体で渡してくれたら、より一層ありがたかったのだが。

そんなわけで、チョコレートで一杯になった紙袋がでーんと、食堂の机に置かれているのである。

「……これは……」

三十は確実にあるな。五十、八十……喜んで。けれどこの状態は、素直に喜べないのが本音である。

「さあさああ、織斑君！」

「私の渾身の一作、食べてみてっ！」

「そんでもって、中に入ってる手紙を読んで！」

「そして、私とあつういヴェーゼを……」

「はい、織斑君！これ！これ先に食べて！」

「あ、ずるい！駄目よ織斑君、先に私のを食べて！」

「ほら、私のは手作りだよ！昨夜徹夜して作ったんだ！」

「さあ、早く食べてっ！」

……ついでに言っておくと、この言葉は断片断片しか聞こえてきていない。あまりに多くの声が重なってしまっているのだ。この状況は恐らく聖徳太子でも乗り切れないだろう。聖徳太子がこんなにもチョコを貰うかどうかは別にして。というか仏教だしな。キリスト教の行事であるバレンタインを祝っちゃ駄目だろ。

なーんて、そんな現実逃避をしている暇さえも——彼女達は与えてくれない。

「……さあ、織斑君っ！」「……」

バラバラだった声が統一される。何で無駄にこういうところだけ合うんだ、IS学園の女子は。

「……貴様ら、何をしている？」

「……い、いえっ！何もしていませんっ！」「……」

バラバラだった声が以下略。普段は周囲の女生徒のように、一緒に縮み上がる千冬姉の怒気を孕んだ声も、今ばかりは俺を助けに来た天使の様に聞こえる。普段が地獄の鬼並なだけに、より一層の効果——。

ぱしーん。

「誰が地獄の鬼だって、織斑？」

相変わらずの読心術である。何だろう、IS学園では必須のスキ

ルなのか？備わっていない俺の方がおかしいのか？

「お前らも、いつまでもぐずぐずしていると授業に遅れるぞ。遅れたらどうなるか、解らない訳ではあるまい」

そんな鶴の一声——いや、鬼の一喝で、俺の周りに陣取っていた女生徒たちは、そそくさと席に戻っていく。去り際に、「感想聞かせてね」とか「手紙読んでね」とか言い残しながら。

やっと喧騒から開放され（俺が、というより食堂が）一息つく。どうやら朝・昼・夜バーストチョコレートストリーム三連弾は、どうやら免れそうである。昼と夜は仕方ないとして、せめて朝くらいはしっかりといつもの食事を取りたい。一日の中の食事で、朝食の量を大きくしている、ということもあるが、授業で疲れているところに甘いもの、というものは存外嬉しいものなのだ。疲労回復も望めるし、一石二鳥といえる。

量が量なのが問題だが、冷蔵庫に保存をしておけば少しは持つだろう。予備知識として、既製品のチョコレートは直射日光を当てたり、高温多湿なところに保存しない限り、一年から一年半は持つ。それが手作りのものに適用されるかは知らないが、目安として考えればいいだろう。

さて、ところで。

「……千冬姉？」

ぱしーん。

「学園内では？」

「……織斑先生。質問があるのですが」

「うむ、何だ」

「これは何ですか？」

「チョコレートだ。そんなことも解らんのか」

「……ええ、と」

朝食のトレイを持って席に戻った俺を待ち構えていたのは、袋の中のものとはまた違うチョコレート。が、二つ。

「一つは山田教諭からだ。正面を切って渡すのは恥ずかしいから渡

しておいて欲しい、と、今朝申し出があった」

ああ、なるほど。よく見るとメッセージカードに『織斑君へ』と書かれて挟まっているのがある。となると、もう一つは……。

「……もう一つは私からだ。文句があるなら言え、すぐさまグラウンド百周＋卒業まで放課後居残り掃除をくれてやる。どうだ、嬉しいか」

「……文句なんてないよ、千冬姉。ありがとう」

素直に、そう言う。ラッピングの施されていない、ただ箱に詰めてセロファンテープで留めただけの、無骨なものだったけれど——それだけで手作りだとわかるからこそ、俺は本当に、感謝を込めて「……学園では織斑先生と呼べと、何度言えば解る。愚弟が」

今度はこつん、と軽く小突かれる。

「すみません、織斑先生。ありがたく頂きます」

「うむ。それでいい」

千冬姉は満足したように頷くと、「山田教諭にも礼を言うておくのを忘れるなよ」とだけ言い残し、食堂を去っていった。

俺はと言うと——その後姿を見送ってから、二つのチョコを紙袋に仕舞い、改めて朝食のアジの開きに手をつけるのであった。今日ばかりは、いつも食べている定食が、すこし特別なもののように感じられた。

「あ、一夏。ちよつと」

二限目の授業であるIS実習を終え、着替えにロッカーへと戻ろうとしていた俺に、そう声が掛けられる。

「おう、シャル。どうかしたか？」

「ちよ、ちよつとここでは。向こうで話そう、ね？」

神妙な面持ち——いや、緊張感？——で言うシャルに、俺は「解った」とだけ返す。

シャルは——シャルロット・デュノアは、フランスの大会社であるデュノア社社長の娘である。

が、その実は複雑なもので、社長とその愛人の娘であったシャルは、両親から邪険に扱われ、デュノア家の——いや、デュノア社の道具として生きてきた。今ここで、IS学園に生徒として在籍しているのも、デュノア社によるところだという。

当初、学園に『彼』としてやってきていたのも、話題作りの一環だった。

俺は別段、シャルにどのような事情があろうと、接し方を変えるつもりはない。変える必要性を感じないからだ。俺の中で、シャルはシャルであって、決して『デュノア社のスパイ』なんかでは無いから。

けれど、本人は——シャル自身は、そう簡単に割り切れることではない。

それなら。

俺が相談に乗る事で、少しでもシャルの気が晴れるのなら、俺は幾らでも付き合う。

友達って言うのは、少なくともそういうものだと思う。

「はい、これ！チョコレート！」

ただまあ、俺の心配はやや行き過ぎたものの様であった。

「え、ああ、おお。うん、サンキュ」

どんな話でも受け止める覚悟を作っていた俺は、そんな半端な礼しか言えないまま、差し出されるチョコレートを受け取ってしまう。そんな俺を見て、シャルは少しだけ、寂しそうな表情を浮かべた。

「……あんまり喜んでくれないんだね？」

ぷうつ、と頬を膨らませて、シャルが言う——普段は大人びた印象の強いシャルが、たまにこうやって見せる無邪気な表情に、俺はいつもどきまぎしてしまう。そういえばシャルがシャルと名乗っていた頃も、こんな感じだったような気がしないでもない。

「いや、シャルがあんまりに真剣な顔で話しかけてくるから。なんか心配事でもあったのかなって、ちよつと思つちまつただけだ」

「ああ、そうだったの」

表情がほつ、としたものに変わる。ころころと変わるシャルの顔は、見ていて楽しくなる。

「……一夏は、優しいね」

「何をいきなり。んなことないって、普通だ普通」

それを言うなら、シャルの方が優しいに決まっている——家族、というものを俺は千冬姉しか知らないが、その家族にそっぽを向かれてもなお、それに尽くそうとするシャルの決意は、俺だけではない——恐らく他の誰にも、そうできないものだ。

「他でもない、シャルのことだからな。放つて置くんかできねえよ」

「へ！？……そ、そう、なんだ……」

「シャル？」

俺としては当然のことを言っただけなんだが、何故だかシャルはしおしおと身を縮こまらせてしまう。何かまずいことでも言っただろうか。

「顔、赤いぞ。風邪か？」

「う！うううううん！？別に、なあんにもっ！？」

と思つたら、ぱつと顔を上げて、ぶんぶんと首を横に振り続ける。どう見ても体調が優れなさそうに見える。

「シャル、ちよつと」

「え、な、なに……？」

シャルを呼び寄せ、そつと額に手を当てる。

「ひゃあ！？い、iiiiiiiiいちか！？」

「……んー、熱は無いみたいだけど……？」

念の為、もう片手を自分の額に当て、集中のために眼を閉じる。

うん、別段シャルの方が熱いわけでもない。思い違ひだったようだ。「つと、ごめんな。びっくりさせちまつて……あ、もしかして、フ

ランスにこういう文化って無いのか？……って、シャル？」

「……え、へへ……え」

目を開けた先に居たのは、——何故だが、とても幸せそうに笑いながら——顔面から廊下に突っ伏している、シャルの姿であった。

慌てて医務室に連れて行ったが、どうやら寝不足だったらしい。

チヨコを作る練習に、徹夜までしたらしく、医務室の先生からシャルはこっぴどくお叱りを受けていた。まあ、その努力の結晶という事なのだから、大事に頂くことにしよう。

ちなみに医務室を出る際にも先生からチヨコを渡された。なんだかやけに先生の目がギラついているように見えたのは……気のせいだろう、うん。

3話（前書き）

鈴は二組なので居ない。

なんて、そんなことはありませんよ。

それと、のほほんさんこと布仏本音さんは地上に舞い降りた天使ではなかるうか、と思う。抱きしめたい。セシリアさんも可愛い。会長はエロ可愛い。ある意味、私が抱くISのイメージが一番出ていく回だと思います。

さてさて、この話で書きだめが無くなる。どうしよう。

3話

場面は変わり、昼休み。

「やつほー……って、うわあ。一人で食事？さっびしー」

鈴は屋上に現れるやいなや、俺を見てそんなことを言い放った。

「……何だよ、悪いか」

俺はむすつとして答える。誰かを誘う誘わない以前に、昼休みのチャイムが鳴ったと同時に、

『織斑君！私のチョコ食べて！』『いや、私のを！』『いや、是非私のを！』『一緒にご飯……いや、チョコを食べよう織斑君！』『織斑君！』『織』

な状態だったので、ほうぼうの体で着いたのが屋上だったのだ。あんなに一斉にこられては、さすがに俺の精神（それと胃袋）が持ちそうに無い。

「別に悪くはないけど、ってうわ！これぜーんぶチョコッ！？」

すぐそばに置かれている袋の一つを覗き込んだ鈴は、そんな驚嘆の声をあげた。

「全部が全部、って訳じゃないみたいだけどな。中にはキャンディやら、クッキーやら……ああ、あとケーキも入ってるぞ」

「うっわあ……あんだそれ、食べ切れんの？」

「食べ切る」

断言する。そうでないとは失礼だし。

「誰かに手伝ってもらったりは」

「それもちよつと考えたけど、しない」

「……念のために聞くけど、何で？」

「そりゃあ、お前、俺への贈り物なんだから。俺がきつちり食べて、きつちりと返す。それがくれた相手への礼儀つてもんだろ」

その言葉を聞くと、鈴はやや呆れたように肩をすくめた。

「本当にあんたって、馬鹿よね……まあ、そこがいいところなんだ

けど」

「ん……なんか言ったか？」

「べつつにー」

そういうと鈴は、ベンチに座る俺の隣に腰掛ける。手から下げた袋から取り出すのは弁当箱。きつと中身は、お得意の中華一色なのだろう。ああ、うらやましい。

「ん……そんな子犬みたいな目で見ないでくれる？」

「ああ、おお、すまん」

いつの間にか、鈴の手元を凝視していたらしい——慌てて視線を手元のチョコレートに戻す。食べる前はホワイトチョコで『Dear Ichika!』と書かれていたそれも、食べ進める内に『ear chika!』という文字に様変わりしていた。何かの暗号だろうか。

「……ふうーん」

「うおわっ!？」

ear 近っ!

「へえ、そう。そんなラブラブメッセージを、簡単に崩しちゃうような男だったんだ、あんたって。少しだけ、その唐変木の原因が見えたような気がするわ」

ぐいぐいと顔を近づけてくる鈴が、じっとした視線をこちらに向けながら、そんなことを言うので、俺は戸惑いつつ答える。

「ちよ、鈴、顔がな、近くてな」

「『近づけて』んのよ」

そつと、耳打ちをする。意図が解らず、混乱する俺。何故、今、この屋上で、耳打ちで話さなければいけないのだろうか。風の音で話しぶらいからか？それにしたって、これはないだろうと。

「もらいつ!」

「あ、おい!」

俺の手元から、食べかけのチョコを奪い去った。

「へっへーん、油断してるほうが悪いのよ…… あ、結構いけるわねこれ」

呆然とする俺をよそに、もぐもぐとチョコを食べ勧める鈴。止めようと思ったところには、もうチョコは親指の先ぐらいしか残っていなかった。

「あんたはもうちよつと、女心つて奴を勉強したほうがいいわね。丁度いいから、この鈴先生がありがたいお言葉をレクチャーしてあげるわ」

ぺろり、と指先を舐め、鈴は言う。

「女の子はね、何もチョコレートを食べてもらいたいわけじゃないのよ。そりゃあ、食べてもらった方が嬉しいんだけど——それだけじゃ伝わらないことも、確実にあるわけ。解った？」

「……………」

とりあえず頷く。言葉の意味は解らんが何やらすごい自信だったので、きつと女性はみなそうなのだろう。鈴は満足したように腕を組み、

「うんうん。それじゃあ、それを頭に入れた上で」

言いながら――。

「……はい」

少しの間を空け、手渡されたのは――チョコレート、だった。

「て、手作りなんだからね！ちゃんと味わって食べなさいよ！それで、食べた後は、ちゃんと感想も言うこと！あ、あと――」

「鈴」

ぴたり、と、口が閉じる。

「サンキュ。すげー嬉しい」

「……え……あ……お……」

と思つたら、今度は口が開いたり閉じたり。何故だか顔も赤い。視線も定まらず、何だか意識だけがどこか別の世界へ飛んでしまっているようにも見えた。

「……………だから……………」

ぼつり、と眩きが漏れる。

「ぎぎぎぎぎぎぎぎぎ義理だから！」

それが鈴の最後の言葉だった——鈴はそれを言い切ると、まるで瞬間加速でも使ったかのように急加速で屋上を後にしたのだから。去った方向では、がつんがつんと大きな音が響いているが、大丈夫なのだろうか。

と、いうか。

「あいつ、弁当忘れていったぞ……」

蓋が開けられて、手を全く付けられていない弁当——ふと目を、そちらに落とす。

「……ん？」

よく見ると、何か一枚の紙切れが、下に敷かれた蓋と箱の間に挟まっている。

蓋を持ち上げる。一枚の紙が、風に揺られて俺の視界に入った。

蓋には、『チヨコばつかじゃ健康に悪いわよ　By 鈴』と書かれた紙が貼り付けられていた。

弁当箱の中では、いつぞやのころと同じような酢豚が、日差しを反射して照っていた。

放課後。

「……一夏さん、どうかいたしましたか？」

授業が終わると、もはや日常の一つに組み込まれているISの自主訓練の時間だが、今日の俺はどうにも動きが悪く、付き合ってくれたセシリアに申し訳がないくらい、こてんぱんにやられてしまった。IS学園に入って、俺も死に物狂いでやってきたのだけれど、やはり代表候補生の肩書きは、伊達ではないらしい。

一つ、言い訳をさせてもらえるならば。

俺を気遣うように、セシリアが声を掛けてきた。俺は顔を上げず、

うめくようにその問いに答える。

「……いや。これからのことを考えると、気が重くて」

「ああ……なるほど」

二人で視線を足元に移す——チョコレートのは数は、百をゆうに超えている。食べたチョコは、昼休みに食べた一つきりで——それもほとんど鈴に食べられてしまったから、ほとんど量は減っていない。そういえば随分前に、プロ野球の人気選手にこれぐらいのチョコが届いた、というニュースを聞いた事があるが、まさかそれを自分が体験することになるとは思わなかった。ああいう人達って、貰ったチョコは一体どうしているんだろうか。体調を考えると、人に配るのが妥当なところだろうけど。

「……配る、か……っと、いかんかん」

一瞬、悪魔が囁くのを、俺は頭をぶんぶん振って追い出す。これをくれた人の一人一人が、たとえばんの少しであろうと俺のことを気に掛けている、ということは事実なのだから、その気持ちを他の人に、それも半ば押し付けのような形であげてしまうのはいいくない。

「少しくらい妥協すればいいのに……」

呆れたようなセシリアの声に、俺は少しむっ、とする。

「そうはいかないだろ。くれた人は、俺に食べてもらいたいって思っ
つて、俺に渡してるんだから」

「……どうしてそこまで意固地になるのか、私には理解できかねますが」

つん、とした態度で言い放つセシリア。けれど俺も、それに負けるわけにはいかない。そっちに言い分があるように、こっちにも言い分がある。

「だってお前、もしセシリアに好きな人が居るとしてだな」

「……え」

途端、硬直。

「お前がその好きな人にあげたチョコを、他の名前も知らない誰か

が食べてるのを見たら、お前はどっ思う？」

「……………」

……絶望した、と叫びそうなセシリアの表情に、少しやりすぎた、と俺は慌ててフォローを入れる。

「い、いや、例え話なんだから。本気になるなよ」

「……一夏さん」

ぼそ、と呟く……何だ、暖房は効いている筈なのに、寒気がするぞ。

「な、なんだ？セシリア——」

「ええ、そうでしたわね。私が甘かったですわ」

ゆらーりい、と立ち上がる——セシリア・オルコットの周囲に、いずんだ暗黒のオーラが見えた。

「そうですわよね、ええ。送り主の思いを、無碍には出来ませんもの、ねえ？」

「え、と。セシリア、なんか……怒ってるか？」

「いいええ？怒ってなんて、いませんとも。えええ、いませんとも」昔の偉い人は言いました。大事な事だから、二回言いました。

「そうですか、そうですか。他の人のお腹に行ってしまうかもしれない、ということでしたら」

額に青筋を日本くらい、ビキビキと立てながら、セシリアは懐から小さな包みを取り出す。

「私からのチョコを、今この場で食べていただいても、よろしいですわよね？ご心配せずとも、私がしっかりと、一夏さんが食べる様を、見届けて差し上げますわ」

顔は笑っているが、目はにこりともせず。

セシリアは、そう言い放った。

確実に言えることはセシリアは今、とんでもなく怒っている、ということ。

「……………すまん、セシリア」

さっきの例え話が無神経すぎたのか、と俺は少し反省し、素直に

セシリアに頭を下げた。

「謝って済むことはありませんわ。一夏さんはもう少し、女心というものを理解した方がよろしくってよ」

「う……それは、鈴にも言われた」

昼休みに言われたことを思い出し、自己嫌悪。全く理解できていないじゃないか、俺。

「全く……まあ、そこが一夏さんの魅力でもあるんですけれど」

「？なんか言ったか、セシリア」

「はっ……い、いえ。何も」

セシリアはそう言っ、こほん、と一つ咳払いをすると、「それでは」と前置きをして。

「こっ……これを、受け取ってくださいな」

シャルや鈴に貰ったものと比べると、やや小さい包み。青色の包装紙は、セシリアの専用機「ブルー・ティアーズ」を意識してのものだろうか——貼り付けられたメッセーじカードには、控えめに『for Mr・Ichika』とだけ書かれていた。

「は、恥ずかしながら、私……その、チョコレートを作ったことがありますでしたので、ええと、色々本で調べたり、チエルシーに電話で聞いたりしまして、何とか形にはなったと思うのですけれど……！」

普段の高飛車な態度とは違い、もじもじと終始俯きながら話すセシリア——俺はその姿に、精一杯頑張っ作ってくれたんだなあ、と思うと同時に、等身大のセシリア・オルコットを見れたような気がして。

「ありがとうな、セシリア」

思わず、セシリアの頭を優しく撫でていた。

「ふ、ふにゃあああ!？」

瞬間、そんな素っ頓狂な声を上げ、普段のセシリアが徐々に戻ってくる。

「い、いきなり頭を撫でるなんて、一夏さん!ああ貴方、一体何

を――」

「ごめんごめん」

「はあ！？ですから先ほども言ったように、謝って済むという問題では――」

「小動物みたいで可愛いな、と思って、つい」
「か」

……フリーズした。しまった、少し怒らせすぎたかも知れない。現にセシリアの顔は、からかわれたことに対する怒りでか、今にも爆発しそうなほど真っ赤だった。いつ雷が落ちるかとおどおどしながらも、急いでフォローにかかる。

「わ、悪い。ちよつとからかいすぎたか……な？」

「……カワイイ……カワイイ……」

けれど当の本人は、何だか呆けたような顔で、視線をあさつての方向に向けて、うわごとのように「可愛い」と呟いていた。そちらに何か可愛い物でもあるのだろうか――そう思って、俺はセシリアの視線に沿うように、顔をそちらに向ける。

「あれ、おりむー。やつほー」

「……ああ、なるほど」

視線の先にいたのほほんさんを見て、俺はぽん、と納得したように手を叩く。小動物系な可愛さ、という点ではなるほど、のほほんさんを差し置いて他には居ないだろう。俺でもたまに、のほほんさんはこりん星人なんじゃないかと思ってしまふときがあるのだ。あれ、でもそれって小動物系かと言われると、少し怪しいな。

「それにせつしーも。そこでなにしてるのー？」

首をかしげながら訪ねるのほほんさん。放課後、廊下のだ真ん中で集まっていれば、疑問に思われても仕方ないか。

「いや、さ。セシリアにチョコ貰ってたんだ」

俺は正直にそう話し、手の堤をのほほんさんに見せる。

「ほほー。おりむーの人気はすごいねー。朝ごはんのときもそうだったけどー」

口元を長い袖で隠し、ぴよんぴよこと跳ねるのほほんさん。その度に、パジャマ付属の猫耳が揺れる。うん、小動物っぽい。のほほんさんの前世は猫か、そうでなきゃプリーリードッグではなからうか。

「後は、まあ他愛ない世間話とか」

「へー。せしりーとおりむーって、世間話できるんだねー」

そりやできるだろう、と思ったが、考え直すと普段、なかなかセシリアの話に着いていけないことが多いな。この間された馬術の話も、俺の頭には？マークしか浮かんてこなかったし。

「どんな話してたのー？私、ちよびつと気になるー」

「え、ああ。のほほんさんは可愛い、って話」

「か」

……フリーズした。あれ、おかしいな。今のはからかう、というよりも、むしろ褒め言葉のつもりだったんだけれど。普段から小動物然としているのほほんさんなら、小動物みたいで可愛いといわれると「えへへーそうでしょー」って言いながらくるくる回って喜んでくれる、と思っていたんだが。それとも、女性を小動物扱いするのはNGなのか？子ども扱いされていると感じられるのか？いかに女心がわからない以前に、俺ってもしかして枯れてるのか？相手は同年代なのに子ども扱い。やばい、本格的に終わってる。それにしても、熱いお茶が美味しい季節もそろそろ終わりだなー。何、だれがおじいちゃんだって。俺はまだ十六だよ、年寄り扱いするな。ああ、それにしても悲しいぐらいに、お茶が美味しい。

「……あ、あははー。わ、私ー、ちよびつとだけ用事思い出したり、たりー。そそそそそ、それじゃー」

「え、あ」

呼び止める暇も無く、そそくさと行ってしまふのほほんさん。嫌われてしまっただろうか。でもそれにしては、やけに幸せそうな顔をしていたようにも見えたのだが。

「……つと、もうこんな時間か」

のほほんさんから目を掛け時計にうつすと、もう六時になるとしていたので、俺は思わず声を漏らす。

忘れかけていたが、俺は今、放課後の訓練を終えたばかりで。今見につけているＥＳスーツが、体から発生する汗を吸収してくれてはいるが、やはりそこは人間。不快感というものは、どうしたって残るわけだ。

まあシンプルに言うと、今すぐにシャワーに浴びたい。

「セシリア、戻ろうぜ。早く帰らないと、また千冬姉にどやされるぞ」

「……っは」

放心状態だったセシリアに声を掛けると、ぱっと目が覚めたように声を漏らし、頭をふるふると揺らす。こうしてみると、やはりセシリアは小動物系なんじゃないかと思うのだが、どうだろう。また怒られてしまうかもしれないので、声に出しこそはしないが。

「……い、一夏さんっ!」

「ん、なんだ?」

「あ、あの、……もう一度、可愛いつて……」

「あれ、あれあれあれ」

「?」

不意に聞こえる声——俺はセシリアから、声が聞こえてきた前方へと視線を移した。

「今ついさっき、本音が真っ赤な顔をしながら走り去っていったから、一体どんな天変地異が起こるのやら——」と思って根源を探ってみたら、奇遇にも私の前には一夏君が現れたわね」

やたらと説明口調で話す、女性——人をひきつける形容しがたい雰囲気、人を圧するような口調、そして何よりＥＳ学園の制服からでも見て解るほど強調されたボディラインに、俺は少したじろぎながら、その女性の名を呼ぶ。

「……楯無さん」

やつほー、と言いながら、ひらひらと手を振る——さらしき たてなし更識楯無。

二年生でありながらIS学園の生徒会長を勤めている、実質上の『学園最強』である存在。楯無さんをそんな存在たらしめているのは、『生徒会長に勝利したものが次の生徒会長であり、その機会は問わない』というとてもな学園上の規則に他ならない。エニタイム・エニウェア、いつでもどこで誰の挑戦でも受けるという、まるでどこかのプロレス王座戦のような口上を、彼女はずっと『守り抜いて』、今なお生徒会長に君臨しているのだ——学園最強、という称号が、似合わないはずもない。

「そういえば、私は」

そんな学園最強は、ちらと俺の手元——セシリアから貰ったチョコがある右手の方だ——を見やり、言う。

「一夏君にまだチョコをあげていなかったっけ」
そして、にやりと笑う。

「……時に、一夏君。リボンの色は、何色がいい？」

「え」

唐突に聞かれ、戸惑う。チョコの好みを聞くというのなら、まだ解らないでもないが——リボンの色？

「ええ、と……赤、です」

「へええ、そう。確かに、プレゼントにはぴったりの色だよねえ」
ぱっと思ひ浮かんだ色をあげたのだが、思ひのほか楯無さんには気に入られたらしい。うん、うん、と頷きながら、視線を今度は俺の足元に移した。

「うん。いいアイデアを出してくれた一夏君には、私からご褒美をあげましょう」

「へ？……あつ！」

言う楯無さんは、目にも止まらぬ動きで、チョコを詰め込んだ紙袋を、俺の足元からすくい上げるように奪った。

「こーんなに沢山のチョコ、一夏君一人じゃきついと思うなあ？
だから、私がそのお手伝いをしてあげまっしょう」

小悪魔を連想させる、そんなウインクを俺に送る楯無さん。

4話（前書き）

- 紅山車速い！殺人バファロー更新に読者仰天
- 紅山車豪弾3話！なろう読者起承転更新指令
- ド迫力のなろう新助っ人紅山車、短編任せろ
- 感想返信任せろ！紅山車、なろうの魔よけや！！
- 読者も合格点！紅山車、感想イケるやん
- 読者安心「2番・短編」紅山車“一発合格”
- 死角なし！なろう・紅山車、活動報告でも1話
- 絶好調！なろう・紅山車が余裕こまーしゃる！
- 巨体紅山車が激走！ド迫力タイピングで一気更新
- 阪神・ジェフ、紅山車の更新に太鼓判！
- ドドドドツなろう・紅山車、更新する凶器や
- 読者唸った！“猛指”紅山車が矛盾殺した
- 読者不敵！007歓迎、紅山車の弱点探して
- なろう・紅山車目覚めた！？春休みで4日4更新1短編4ISS

なお八月に帰国する模様

短め。でも投稿。のほんさんのすばらしさを、皆さんに知ってもらいたいから……！それも含めて「俺」やから……！（、o、）意外とのほんさんはきよめーらしい、という事実は知ってもらいたいと思うんだ。貧乳派？フフン（いじめるとかわいいのよ）

今更ながら、野球ネタ（というか2chネタ）をわかってくれる人はどれくらいいるのだろう。前のこまーしゃるとか、完全に独りよがりなものになってしまっているような。本当に今更ですが。

さてさて、これで書き溜めがなくなりました。本当に。ゼロの中の

ゼロ、濁々です。しかもこの先どうしようとかも、まだ思いついていない有様。紅山車ンゴwww

何でや！赤田関係ないやろ！

4話

「酷い目にあつたものだな、一夏」

満身創痍、命からがら、ほうぼうの体——そんな程度副詞がぴつたりな俺が向かった食堂。

まるでその目で見てきたような言い方をするラウラに、俺は机にへばりつきながら返す。

「全くだ。俺が何をしたって言うんだよ」

「いや、それは知らんが」

見てきたわけではないらしい。

「セシリアの奴が、一夏に向けて誘導兵器を総動員してぶっ放したと、生徒達の間で話題になっていた。全く、セシリアはなんて奴だ！」

「そう、そうだよなあ。幾らなんでも生身の人間に——」

「生身の人間一人に、備わっているビット六つを全て向けるとは。

その間に第二目標に狙われていたら、どうするつもりだったのだろう。戦場ならば、セシリアは既に打ち落とされて、屍の山を形成する内の一人になっていたところだ」

「……ああ、そうだな……」

相変わらずミリタリーな視点に、苦労が分かち合えると追っていた俺は肩透かしを食い、持ち上げた上体を再び机にへばりつかせる。

「それもその相手が、私の嫁である一夏とは。セシリアには、きちりと教え込まなければならん」

「……何を？」

期待せずに、内容を促す。

「勿論、一夏は誰の所有物なのか、ということを」

「誰のでもないから。俺は俺だから」

それと、人を物扱いしてはいけません。

「……そういえば、あの見苦しく膨らんだ袋が見当たらんが。部屋

か？」

「いや、違うけど。っていうか、聞いてどうするんだ？」

「ふん、知れた事」

そう言つてラウラは、得意げな顔で机に肘をついた。

「戦場で大切なのは、『目標を迅速に撃破する』ということだ」

「撃破するな」

こん、と小突く。

「ふん。お前は私のチョコだけを食べればいいんだ……あ」

ラウラはぶっきらぼうにそう言つと、一瞬、しまった、という顔を見せた。

「ああ。そういえば先週、そんな話もしたな。ラウラもくれるのか？」

「えあ、つと、その……や、やらん！」

「……えー」

あつさりと言を撤回するラウラ。軍人は、素早い判断と行動が大事だが、こうも早いのはさすがにどうなのだろう。『兵は神速を尊ぶ』とはよく言うが、こんなに早く変更されたら兵もきつと驚くだろう。『その疾き事風の如し』、つて風が吹く前に方向転換をしているような感じじゃないか？

「あ、いや！やらん訳ではない、訳ではないんだが……！」

顔を真っ赤にして、手をぶんぶんと振るラウラ。今ではない、とはどういうことだろう。持つてくるのを忘れたのか、それとも——はっ！まさか、某根川さんの如く、いつ渡すかまでは言っていない、という奴か！？『渡す……渡すが……今回まだその時と場所の指定まではしていない』ということか！？ラウラのチョコにたどり着けるのは、10年後、20年後ということか……ッ！？くそッ……通るかッ！……そんなもんッ！

「と、とにかく！一夏は部屋で待ってればいいんだ！解ったか、解ったら領け！そしてサーと言え！」

「さ、サー」

押し切られるように、声が抜ける。それを聞いたラウラは、「ふん！わかったらいい」と言い残し、自分の分のトレーを下げに行ってしまった。……一体なんだというのだろうか。

「お、おりむー」

「？」

ラウラが居なくなったのとほぼ同時に、俺に声が掛かる——この声と呼称は、のほほんさんだ。

「……あれ？」

ふと感じる違和感。いつもののほほんさんは、IS訓練のとき以外は、サイズの大きいだぼの服を着用している。けれど、目の前ののほほんさんは、見たことのない服装をしていた。

桃色のワンピースにチェックのスカート、花をあしらったコサージュのような髪飾り。スカートの丈を気にして、裾を手で押さえながらもじもじしている姿は、普段の俺が知るところの「のほほんさん」では、全く無かった。

「え、えっと、ねー」

のほほんさんはどうやら、頬を紅潮させ、拳動不審であちらこちらを見ながら、話の糸口を掴もうとしているようだった。くりくりと毛先をいじるすぐさなど、平常の天真爛漫なのほほんさんからは想像も出来なかった行動を取っていた。

「ど、どうかなー。似合うと、おもぅ？」

蒸気機関車のように頭から湯気を出しながら、俺に問いかけてくる——ちなみにここまで、ずっとのほほんさんはスカートの裾を手で押さえている。自分でも、珍しい格好をしていると感じているようだ。食堂にちらほらと見える生徒からは、「鼻血がでそうなほどかわいい」「家で飼いたい」「撫で回したい」「思う存分愛でたい」などの意見が頻出している。結構大きな声だったが、今ののほほんさんにはそれすらも聞こえていないようだった。

ふと、俺の声も聞こえるんだろっか、という不安がよぎるが、ひとまず問いに答えることにした。

「いや、めちゃくちゃ似合ってると思うぞ」

「……そ、そー？ありがとー」

くしくしと、頭を手で掻きながら俯くのはほんさん。こういった何気ないところでも、小動物的行動が垣間見れる辺り、目の前に居るのは間違いなくのほほんさんだ、と再確認をする。

……それにしても。

「えへへ、似合ってるー、ってー。う、うれしいこといつてくれるじゃーないのー」

ぴょんぴょこと跳ねるのはほんさん——その際、普段の格好ではあまり目立たない、その……豊満な部分が、今の格好では強調されて、一緒になつて揺れているのであつて。目に毒、とは言わないけれど、正直に見ていたらどうかなりそうだ。

「そ、そんな優しいおりむーにはー……」

ぴたりと動きを止め、ロボットのようになぎこちない動きで、手を後ろの鞆に回す。

「え……つとー、こ、こ、この……」

「……………？」

どうやら、何かを取り出すのに四苦八苦しているらしい——なんだか取り出すのを躊躇っているようにも見える。そのくせ顔はこちらに向いたままで、うまくいかないもどかしさからか、焦ったように口を波立たせている。

「……この、このこのこのこのー！」

「……………」

なんだろう。先ほどの台詞を続けているんだろうけれど、なんだか罵られているように聞こえてしまう。口で人を罵倒するのはほんさん、というのも、新鮮だとは思うけれど。あいにく俺はそれで喜べる気の持ち主ではないので、ちよつとへこんだりする。

なんてやっているうちに、上手く取り出せたようだ。少しほつとした表情——後に、意を決したように一度、頷いてから——のほほんさんは、後ろに回した手を前にさしだし、
言った——。

「この、チョコを——」

『あーあー、テストス』

突如、食堂に響く大音量。

それがスピーカーから聞こえてくる、楯無さんのものである、ということに気付くのに、そう時間はかからなかった。

『どうもー、皆の生徒会長の更識楯無です』

彼女は、そんなわかりきっている自己紹介を済ませると、すぐさま本題に入った。

『えー、と。バレンタインも終わりに近付いているけれど、ここであるイベントを催したいと思います』

——イベント。

普通の人間なら喜ぶべきその言葉に、俺は嫌な予感しか感じられなかった。

何を隠そう、それが『あの』更識楯無の言葉だから、である。けれど。

『開催場所は生徒会室、時間は十分後の八時から。誰でもお気軽に、ご参加下さい』

淡々と、イベントの概要を説明していく楯無会長。普段の破天荒な彼女と違い、意外とまともな説明だったので、普段から引き回されている俺としてはほっとした分、少し拍子抜けしたように感じる。『ああ、それと』

と、思い出したように付け加える——なんだろう、嫌な予感しかない。

『織斑一夏君は強制参加です。彼を見かけた生徒は、即急に確保し、生徒会室へと連行してください』

その瞬間。

食堂に居た俺以外全ての人間の視線が、こちらに向く。
あれは間違いなく、獲物を狩る肉食獣のそれだった。

『それでは企画名を……コホン。その名も、『第一回チキチキ！織斑一夏にチヨコを食べさせよう選手権』！！どんだんぱふぱふ』

こちらの都合も知らずに——いや、知っているからこそか——楯無さんは、イベントの名前を発表して。

『最後に一夏君。出来るだけ早く、生徒会室へ来るように。ではでは——』

——そんな不吉な言葉を残して、ぶつりと、スピーカーの音が切れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7273r/>

IS<インフィニット・ストラトス> ~ 咲き乱れる黒百合 ~

2011年3月23日03時25分発行